

問三 文中の傍線部の漢字と同じ読み方をするものをそれぞれのの中から一つ選んでマークせよ。

- ① コンサート会場は閑散としており、昔の人氣がうそのようだ。
1 暗黙 2 緩慢 3 没頭 4 割愛 5 頑迷
- ② 彼のスピーチは、論理が破綻している。
1 滞留 2 操縦 3 悲嘆 4 独断 5 錠剤
- ③ 作者の内裏に迫るため、小説をいくつも読んだ。
1 雄踏 2 隠匿 3 押取 4 慫慂 5 速浅
- ④ その女優は柔和な笑みをたたえて、写真撮影に応じている。
1 従風国 2 乳酸菌 3 基本給 4 守護菌 5 研修生
- ⑤ トンネル工事に難渋し、道路の開通は遅れる見込みだ。
1 拾得 2 改竄 3 喜寿 4 痛切 5 猛獣

次の文章を読んで問四～十一に答えよ。

国際線も含め、飛行機に乗り遅れたこと5回。学会や研究会などの日程を間違えて、発表やコメントをばたしてしまっただけでも数回ある。その節は本当にごめんなさい。物忘れが激しく、外出中はないが、忘れ物に悩まされる。財布を家に忘れたことを駅で思い出、取りに帰って再度家を出たら、取りに帰ったはずの財布をまた忘れてしまった、などというウルトラC級のやらかしをしてしまったこともある。家族や同僚をはじめ、関係する多くの人々に、苦勞や迷惑ばかりかけている。こんな場ではあるが、心して謝りたい。

僕のような存在は、当然「あるべき世界」からは、忌避される。義務教育期間にも、僕はいびん教師に怒られてきた。それは大変な怒りを伴うことも稀にあったが、教師の張り手で5メートルほど吹っ飛んだことがあるというのが僕の武勇伝だ。諦観にも似た、哀れみの微笑を教師に向けられることが常だった。

あ、僕はひどいイジメの対象となったり、「シカト」などの排除の暴力を受けたことはなかった。好きな音楽、視聴しているテレビ番組、ゲームのセンス、読んでいる本などを友人たちと共有することはとても難しかったが、「どこかズレている変なヤツ」として、受容されていた部分はある。きっとそれは、自分のズレを一つの「キャラ」として、ある種の戦略性を伴ってエンタメ化し、それな

りのポピュラリティを獲得していたからだろう。こういう時は、あいつが笑いとってくれる。

そういう期待感を引き受け、僕は先生に真顔で珍妙な質問をしたり、おどけてクラスの雰囲気や和らげたりする役割を担っていた。い、先生に気に入られたり、学級委員になったり、クラス対抗レレーに選ばれたことなどはない(したがってモテない)。そう、僕は常にクラスの周縁に a、時が来ると(求められると)その役割をこなし、そしてさつと身を引く。そのような周縁的で境界的な存在であることに、いつしか慣れていた。「親友」や、ましてや「彼女」なんていう存在は大学に入るまで無縁で、いつだって僕はクラスの中心を外れから眺めながら、ふわふわと浮遊していたように思う。

そんな僕が、インドラの周縁に位置するトライブ(少数民族)の世界にはまりこんでいたのは、偶然ではなかったのかもしれない。広大な沙漠をゆるやかに移動しながら、ラージプート(王族)やバラモン(聖職者)などの権力や中心性を意識しながら、周縁部における位置取りに b、人々。「不可触民(ダリト)」の人々のように、排除と包摂の二元論がはっきりとしたコントラストを持って混在している両義的な存在とも違う、絶妙な距離感と浮遊感をもって社会を構成してきた人々。それが、僕が接することになった沙漠のトライブ、ビール(BH)の人々の生存戦略だった。

社会的にも文化的にも「逸脱」している部分は散見されるものの、少なくとも(都市部ではなく)沙漠エリアでは緩やかに社会に c、れ、それでいてズレや逸脱が許容されているような人々の生き様。意識的ではなかったが、僕はきっとそんな彼らの飄々とした生き方に憧れるとともに、自身の生き方に対する正当性を見出そうとしていたのではないか。う、このズレや周縁のゆらぎを許容する社会のあり方に、何か可能性を感じていたのではないか。この文章を書きながら、僕は改めてそう思うのだった。

ゆらりゆられて 異国の海へ
白い波頭 カメメのアラベスク
夢じやないさ コトバ喋るジュゴンの涙
雲ひとつない空が エキゾチックに
大陸を駆け抜ける 思いは果てもない

空に羽ばたけ 美しきかの人
カリヨーピンガに 生まれかわって

パーブーと別れてから1年後の1995年、僕はまたゆらゆらゆられて、インドの地に降り立った。最初にインドを訪問してから、新型コロナウイルスの世界的な流行によってビザの発給が禁じられた2020年までは、必ず1年に1〜2度はインドを訪れている。今から考えても、なんで自分がこんなにも取り憑かれたようにインドに通い続けてきたのか、よくわからない。研究のため、という部分もあるのだが、「え」「今いる場所から一時的に避難しなきゃ」という感覚に近かったと思う。

大学時代の学友に尋ねてみると、「日本は好きだけど、居続けると苦しくなっちゃうって、よく言ってたよな」とおっしゃる。スーツを新調し、インタンをやって、企業説明会に出て、エントリーシートを書いて、面接受けて、という慌ただしい日々を送っている当時の学友たちに（皮肉ではなく、本当に）尊敬の眼差しを向けつつ、僕はずっと「この息苦しさから解放されたい」と呟き続けていた。

いつしか僕は文化人類学を専攻し、インドをフィールドとして、研究者になろうと考え始めていた。大学3年時にはほぼ単位は取り終わり（勉強面では真面目、卒業要件は卒論を残すのみとなっていた。しかし僕は、あつという間に「新卒採用」なるライフプランを手放し、アルバイトでお金を稼いでインドに「d」という生活を選んだ。気がついたら、大学を卒業するまでに6年間もかかってしまった。お、この余禄のような2年間は、今でも自分の中で実践と思考の往還を行うことのできた、最も豊かな時間だったと考えている。

毎年、インドでの最初の滞在場所をコロコロと変えてつづき、最終的にはタール沙漠の「おへそ」ジャイサルメールに向かう、というのが定番のフィールドワーク計画になっていった。広くインドの多様性を捉えつつ、自分が最も見てみたい世界（フィールド地）を多様な文脈から捉えたい、という思いがあった。

ある時はインド最大の商業都市ムンバイへ行き、クラフトラフトビルを歩み、ある時はガンジス川沿いの火葬場が有名な聖地バナラスの路地に浴け込み、ある時はヒマラヤの麓でチベット僧と生活を共にし、またある時にはインド洋に突き出した灼熱の美しい砂浜でヤシ酒を楽しんだりも。全く、これが全部「インド」だったというんだから、国民国家という枠組み自体がなんだか滑稽なものに思

えてくる。この国は、行く先々で違う宇宙が構成されていたし、どこも魅力に溢れていた。しかし、旅の折り返し地点で向かう先は、いつも決まっていた。ジャイサルメールにつくと、まずしなければならぬのは、パーブーを探し出すこと。

この2回目の訪問は、運がいいことにジャイサルメールの都市部のパーザール（市場）で、パーブーと同じ氏族の「大オジ」にあたる人物と偶然に遭遇することから始まった。さっそく話しかけると、彼も僕のことを覚えてくれていた。そして、バス停近くのジューススタンドでパイナップルジュースを飲みながら、パーブーの現在の居場所を教えてくれたのだ。

「彼は今、母方のオジの村にいます。砕石工場¹で働いているらしい」
大オジはそう言った。同村はジャイサルメール都市の中心部から北へ8キロほどいったところにある。同じ部族民ビルの中でも、「リーリヤー」と呼ばれる氏族が移り住んだ地であることは知っていた。おそらく彼は母方の系統に縁故を辿って、なんとか生きつないでいるのだろう。僕はさっそく城砦の前にあるスタンドに行き、ジープをチャーターしてその地へと向かった。

高台に広がる村に着くと、泥造りと石レンガ造りの家屋が18軒ほど無造作に集まった集村であることがわかった。ジープの音を聞きつつ、ソロソロと村人たちが集まってくる。一緒に真っ黒な顔をし、白い歯をチラチラと見せながら、ドライパーと何やら話を始めた。この村は、チマラムと呼ばれる実在の祖先（パーブーの母の曾祖父）が移り住んだことで始まった定住地で、メンパーは全てビル・トライブの人々によって構成されている。盤え立つ高台の下方には、どこまでも続くように思われる岩盤が広がっており、この地の人々はこの黄砂岩でできた岩盤を切り崩して砕石しては、建材としてトラクターで業者が運び込むことを生業としていた。村では、パーブーの家よりもはるか立派な家々が自立ち、砕石業がそれなりにうまく回っていることを物語っている。

村人の一人は、パーブーはどこか、日本から訪ねてきたのだと伝えると、近くの砕石場で働いている、と教えてくれた。

砕石場へジープを走らせると、ノミやハンマミを持った人々が、黄土色の粉塵を撒き散らしながら岩に打ち込んでいる光景が目に入ってきた。彼らはこの強烈な直射日光の中、砕石作業から出る粉塵と戦いながら、1日を過ごしているというのか。30センチメートルほどに打ち砕かれた岩の残骸が山積みになっており、人々はそれ

らをワン!! と力を込めて持ち上げ、トラクターの荷台へと積み上げていた。顔には流のように汗をかいていて、その滴る汗は乾ききった岩に一瞬の水玉模様を描いたと思ったら、あつという間に蒸発してしまふ。なんと過酷な労働現場だ。

トラクターの荷台には、積み上げられる岩を均等にガラガラと並べている、他の男たちと比べると一段とひ弱そうな身体、もはや精根尽き果てたとしても言いたげな表情を浮かべた青年がいた。パーブーだった。彼は彼の顔を見ると、少しだけ照れくさそうな表情を浮かべ、トラクターの荷台からヨロヨロと降りてきた。

「やあ、コーダイ。久しぶりだな。いつ到着したんだい?」

疲れ切って声も出ないのか、彼の口から出る微かな音が、トラクターのエンジン音にかき消されそうになる。僕の知っているあの物知り顔で、時に哲学的なボエムを口走る、あの青年に間違いない。彼にはこの現場は似合わない。咄嗟にそう思った。

久々の再会を喜ぶような空気感ではない。フラフラしている彼をジープに乗せると、いったん我々はチマラムの村に戻った。彼は母方のオジの家の一角で腰を下ろし、親族の女性が続つてきてくれた水瓶を手取る、随分と上方から水を垂らして口に流し込んだ。

彼は一息つくと、ここ一年であった出来事をがいつまんで話してくれた。

父が選んだ結婚相手、性格のキツイわがままな女性で、結婚後喧嘩を繰り返した挙句に実家のある村に帰っていったこと。その結婚式の費用を捻出するために、近くの集村(コトリ村)の支配カーストたちから借金をした。そしてそれを返さなくて何度か強く返済を迫られた上、つい1ヶ月前にその男たちに家を襲われたこと。彼らはライフルを手にパーブーの家を押しかけ、パーブーの口の中に銃口を突っ込みながら脅し、家の中を荒らして物を壊し、挙句の果てに父を殴打して帰っていったという。追いつめられたパーブーは、なんとか借金の利息だけでも払うべく、母方の親族を訪ねて碎石の仕事を得た、ということだった。

華美な結婚儀礼が「あたりまえ」として望まれる沙漠の社会では、その費用をめぐっての金銭トラブルが絶えない、と聞いている。

婚姻儀礼は、特に花嫁側の親族に課される持参金が問題とされており、そのため「娘の結婚のために父は一生分の稼ぎを使う」などといった言われ方もされていた。持参金を目当てに婚姻関係を作り出し、儀礼後に花嫁を殺してしまう、持参金殺人と呼ばれる事件も、たびたび新聞を賑わせていた。「娘を二人持つというこ

とは、死を意味する」という話も、インドの他の場所ではよく聞く話だ。そのため、カースト社会における高い階層では、出産後女の子であることがわかった瞬間に殺してしまう、という噂話が絶えない。

一方で、ビールの社会では、この持参金に関する文化的規制が、それほど強くはない。婚姻儀礼に関しても、ある程度双方の支出がバランスを取れるような仕組みになっっている。

とはいっても、だ。人生の一大イベントよろしく、絢爛^{じゆらん}で華美な婚姻儀礼を行わないことは親族の恥ともされ、借金まみれになっても派手に執り行わなければならないものであることに変わりはない。

なんと馬鹿馬鹿しい! と思うなかれ。日本では、コロナ禍の影響も手伝って、ジミ婚などといって、いかに儀礼的な行為を低コストで済ませるか、というトレンドになっっている。経済的な論理、つまり合理性や生産性を考えた時に、結婚式ほど無駄なものはない。それは、我々が「個」として分断された上で、社会的役割を競争によって「自ら勝ち取るものだ」という個人主義的世界に生きているから、感じることだ。では沙漠の世界ではどうか。

沙漠の世界では、人間と人間のつながりやネットワークをいかに駆使するかが、生きていく術の鍵となっっている。パーブーが追いつめられて、母方のオジの村に飛び込んだのも、姻戚関係がセーフティネットとして機能している証だ。華美な結婚式は、ある意味、**II**の核としてあり続けてきたのだ。

「親族」という言葉が、沙漠の世界ではとても重く響きわたる。例えば、読者のあなたに問う。

あなたほどまで祖先の名前を言うことができますか?
父親はもちろん、祖父、曾祖父くらいまではいけそうだろうか? おそらく100人の学生を集めて聞いたら、「ひいじいちゃん」の名前を言えるのは1〜2名いるかどうか、というレベルだろう。

では、タール沙漠に居住している10歳くらいの男の子に、お父さんの、お父さんの、そのまたお父さんの……という感じで、どこまで言える? などと聞いてみよ。僕は何度か試したことがあるが、大概10代上の祖先の名前を系譜が口から出てくる。もともとも多い子で、15人も祖先を遡ることができた。どうやら小さい頃から呪文のように祖先の名を詠唱することが求められているようだ。日本の小学生が九九を覚えさせられるように。

しかし、これは極めて「実用的」な知識なのだ。土地や生まれが全く違ったトラ
 イブ同士がばったり出会った時、彼らが延々と祖先の名前を口ずさみ、ピタッと合
 う瞬間までその関係を探っていく、という行為を何度も見かけたことがある。それ
 が5代前でも、8代前でも、系譜が重なる場所が出た瞬間、彼らは「同じ親
 族」として、過剰に親密性を表現するようになる。会ったばかりの未知なる人物
 が、実は生き別れていた兄弟だった、という場面に似たような、奇妙な符合を楽し
 んでいるかのようだ。

ことごとさように、彼らは「血」の関係を尊ぶ。そしてその関係の網の目は、
 我々が考える「近代家族」「核家族」の感覚を超えて、はるかに広がりを持つ。過
 去に向かって、いかようにも拡張しうる関係の **Ⅳ**。これは、父系的な「血
 縁関係」だけにとどまらない。「妻や妻方オジなどを通じた」「他の氏族集団」へと広
 がる「婚姻関係」も、重要な **Ⅱ** の核となるのだ。

小西公大著「ヘタレ人類学者、沙漠をゆく」(大和書房) から

問四 傍線 イ、ニの本文中における意味に最も近いものを、それぞれの中から

- 一つ選んでマークせよ。
- イ 無造作に—— 1 おもむろに 2 ぞんざいに 3 にわかに
 4 ねんごろに 5 ランダムに
- ロ 精根尽き果てた—— 1 根絶した 2 精進した 3 尽力した
 4 疲弊した 5 摩滅した
- ハ 口走る—— 1 冠する 2 吟ずる 3 講ずる 4 資する
 5 奉ずる
- ニ かいつまんで—— 1 大枠に沿って 2 おしなべて
 3 全般的な傾向として 4 多岐に渡って
 5 要点を絞って

問五 空欄 a s e には、次のどの動詞の活用形を入れるのが最も適当か、それ
 ぞれ一つ選んでマークせよ(同じ動詞を二度用いてはならない)。

- 1 溢れる 2 長ける 3 漂う 4 飛び立つ 5 包含する

問六 空欄 あゝお には、次のどの言葉を入れるのが最も適当か、それぞれ一つ
 選んでマークせよ。

- あ 1 しかも 2 そのため 3 ただ 4 同様に 5 なかでも
 い 1 加えて 2 さもないと 3 少なくとも 4 すなわち
 う 1 かえって 2 さりながら 3 そして 4 それなのに
 え 1 これによって 2 しかるに 3 それより 4 ないしは
 お 1 および 2 しかし 3 それなら 4 というよりも
 5 まして

問七 空欄 I には、次のどの文を入れるのが最も適当か、一つ選んでマークせ
 よ。

- 1 あたかも古の慣習を現代に再現させたと見なせる
 2 さすがに行き過ぎたケースに驚かされたのが正直なところだ
 3 沙漠の世界でも極めて不幸な例に見舞われたと言えよう
 4 まるでその典型的な例に出会ってしまったようだ
 5 物語の世界を現実社会で目の当たりにしたかと思われた

問八 空欄 II (二か所) には、次のどの言葉を入れるのが最も適当か、一つ選
 んでマークせよ。

- 1 系譜 2 個人主義 3 婚姻儀礼 4 生存戦略 5 文化的規制
- 問九 傍線 III とは何を指すか。次の語句から最も適当なものを一つ選んでマ
 クせよ。

- 1 沙漠に生きる子どもが代々の祖先の名前を暗唱できること
 2 沙漠の民が互いに過剰な親密性を表現できること
 3 日本の小学生が九九を使いこなせること
 4 パーラーが派手な結婚式で親族を拡大していること
 5 ひいじいちゃんの名前を日本の学生でも覚えてしていること

問十 空欄Ⅳには、次のどの言葉を入れるのが最も適切か、一つ選んでマークせよ。

- 1 インフラ
- 2 カースト
- 3 トレンド
- 4 バランス
- 5 ネットワーク

問十一 本文の内容と合っているものを一つ選んで解答欄Ⅴにマークせよ。

- 1 大学卒業に6年を要した筆者だったが、その要因は単位取得ではなく、手続きの不備にあった。
- 2 「どこかズレている変なヤツ」だった筆者は、だからこそ研究者になったのだと自己評価している。
- 3 パープーの不幸な結婚生活には、ダーウリーの不足が主な背景として挙げられる。
- 4 筆者が繰り返しインドを訪れていたのは、日本に全く居場所を見つけないことができなかったからだ。
- 5 ビールというトライブは、パープーにとって、その支援を受けることのできる拠り所であった。